

たき よし みちか
滝 吉 美知香

学位の種類 博士（教育学）
学位記番号 教博 第 116 号
学位授与年月日 平成 22 年 3 月 25 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条 1 項該当
研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程）
総合教育科学専攻
学位論文題目 高機能広汎性発達障害者における自己理解に関する研究
論文審査委員 (主査)
准教授 田 中 真 理 教授 細 川 徹
教授 川 住 隆 一
教授 別 府 哲
(岐阜大学)

<論文内容の要旨>

本研究は、自己と他者との関係性の特異性に根源をおく高機能広汎性発達障害者（以下、広汎性発達障害者）が、他者との関係性の中で自己をどのように理解しているのかを解明し、彼らの自己理解の特性に基づいた心理臨床的支援について、実践的検討を通して明らかにしたものである。

第 I 部では、まず、思春期・青年期の広汎性発達障害者の自己の形成をとりまく現状と支援の必要性について叙述した（第 1 章）。次に、広汎性発達障害者を対象とした自己理解の様相に関する先行研究を概観する中、自己を主体的自己と客体的自己という 2 つの側面からとらえ (James, 1982; Mead, 1934), さらに, Neisser(1988; 1993; 1995) による 5 つの自己知識に基盤を置いたうえで、本研究では、広汎性発達障害者の自己理解を、客体的自己における想起的自己および概念的自己という枠組みによりとらえることを明記した（第 2 章）。また、広汎性発達障害者を対象とした心理臨床的支援のうち集団療法に関する先行研究の概観を通して、本研究では、広汎性発達障害者の言語面での表出や理解の困難さを行為化によって補い、情動の活性化、自己の対象化・相対化を促進する心理劇的ロールプレイング (Psycho-Dramatic Role-Playing, 以下心理劇的ロールプレイング) に着目することとした（第 3 章）。以上のような先行研究の動向と課題の明確化を

行い、当該研究領域における本研究の位置付けと各章の全体構成を示した（第4章）。

第Ⅱ部では、広汎性発達障害者の自己理解の特徴を明らかにするという目的に基づき、概念的自己の側面として、広汎性発達障害者の障害特性を反映した分類基準であるモデルを考案した（第5章）。領域分類、対人性タイプ、肯定／否定 (Domain, Human Relation, Positive / Negative, 以下 DHPN) の3つで構成される DHPN モデルを、定型発達者を対象に適用した（第6章）後、それとの比較を通して、広汎性発達障害者の自己理解を検討した（第7章）。その結果、主に以下の4点が明らかにされた。広汎性発達障害者は、①他者との相互的な関係性の中で自己を否定的に理解し、他者の存在や影響を全く交えずに自己を肯定的に理解すること、②他者から自己、あるいは自己から他者へのどちらか一方向的な関係性の中で自己を理解すること、③人格特性の領域における自己理解が少ないこと、④一見して自己とは無関係な社会的情勢や規律が自己の安定に影響を与えること、である。また、広汎性発達障害者における想起的自己としての体験や出来事に対する意味づけを、自己理解との関連において明らかにするという目的に基づき、保護者を対象とした調査により、広汎性発達障害者の日常生活場面における言語および行為による意識的・無意識的な表出をとらえ、仮説生成的な検討を行った（第8章）。その結果、障害との関連で自己を否定する広汎性発達障害者も、障害に対し肯定的あるいは悩まない広汎性発達障害者も、どちらも他者との関係性における失敗体験を有することが示された。第Ⅱ部の結果として、広汎性発達障害者における想起的自己と概念的自己とのつながりの脆弱性が示唆されたといえる。つまり、広汎性発達障害者が自己の概念化を行う際、過去の失敗を自己理解に強く結び付け、自己を極端に否定的にとらえたり、逆に、過去と乖離させることで自己を極端に肯定的に理解するなど、過去の出来事や体験に対し程よい距離感を保つことの困難さが示された。

上記の脆弱性に対する支援として、第Ⅲ部においては、実際に広汎性発達障害者を対象として心理劇的ロールプレイングを実施し、その効果的な実施法の考案・確立について検討した。まず、広汎性発達障害者が心理劇的ロールプレイングを経て示した変化・不変化を以下の3パターンに分類した（第9章）。①対人性を交えず自己の行動スタイルを否定的にとらえる自己理解から、相互的な対人性の中で自己の人格特性を肯定的にとらえる自己理解への変化、②相互的な対人性の中で自己の人格特性を中心とした否定的な自己理解を行う一貫した傾向、③対人性を交えずに自己の行動スタイルを中心とした肯定的な自己理解を行う一貫した傾向、である。次に、その変化パターンごとに代表事例をあげ、心理劇的ロールプレイング過程を詳細に検討し、自己理解の変化・不変化の背景や要因について考察した（第10章）。さらに、心理劇的ロールプレイングによる支援を通して、広汎性発達障害者の体験や出来事に対する意味づけと自己理解との関連が、日常生活場面においてどのように変化したか、広汎性発達障害者の保護者を対象とした調査を行った（第11章）。その結果、広汎性発達障害者が自分自身の体験や気持ち、理由などの言語による表現

が増加したことが示され、心理劇的ロールプレイングの実施により想起的自己と概念的自己のつながりが促進された結果として解釈された。

＜論文審査の結果の要旨＞

広汎性発達障害者の心理的特性を解明しようとする研究においては、そのほとんどが定型発達を基準として、それとの比較検討のなか「欠損」や定型発達からの「遅れ」の内容や程度を明確にしようとする知見が示されてきているなか、本研究では、広汎性発達障害者の独自性に注目することが支援にあたって求められるとしている。このような問題意識にたち、本研究では広汎性発達障害者が、他者との関係性の中で自己をどのように理解しているのか、さらにその自己理解の特性に基づいた心理臨床的支援の実践的有効性について検討することを明らかにしたものである。

本研究は、主に3つの点において評価できる。第一に、特定領域への興味・関心の持ち方、自己と他者との関係性の特異性、極端な肯定的あるいは否定的自己評価がみられる、という広汎性発達障害者の特性をふまえた自己理解モデルを独自に考案している。このモデルによって、多様な状態像を示す広汎性発達障害者一人ひとりの自己理解の様相の適切なアセスメントを可能にした点が評価できる。第二に、心理臨床的支援方法としての心理劇的ロールプレイングによる実践的有効性について、想起的自己と概念的自己との関連の脆弱さをどのようにつなげることができるかという観点から明確にしている。この観点を導入することによって、広汎性発達障害者の自己理解の様相と状態像に合わせた実践の指標を提示した点が評価できる。第三に、自己報告にもとづき構成される自己理解（面接調査場面）、言葉だけではなく行為による表現を用いた自己理解（心理劇的ロールプレイング場面）、身近な他者によってとらえられた自己理解（日常生活場面）、という多角的検討を行なっている。このような多様な側面からの自己理解の様相を示すことによって、より包括的な視点からの理解と支援のあり方の重要性を提示した点が評価できる。

以上のような本論文の意義が指摘できる一方で、想起的自己をどのように把握していくのかという方法論と、それを決定するにあたり想起的自己と経験への意味づけとの関連を明確にするための定義の再考が求められること、自分自身を対象化していくことを促す支援のあり方と想起的自己・概念的自己の脆弱さを減少することとの関連性を明確にするために、自己理解モデルおよび心理劇的ロールプレイング構成の精緻化が求められること、および本研究で示された自己理解モデルを臨床場面で汎用するにあたりそれぞれの事例にとっての必然性や支援の方向性をふまえる必要があるという問題点が指摘できる。このような課題は残されているが、広汎性発達障害者が他者との関係においてどのように自己理解を形成していくのかを独自の観点から綿密に検討されており、斯学

の発展および広汎性発達障害者への心理的支援に大きく寄与する内容として評価できる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。